

# 清水焼団地50周年記念事業に関わって

京都府中小企業特別技術指導員の舟越一郎氏(京都市立芸術大学大学院講師)に上記テーマで寄稿いただきました。

## 清水焼団地が出来て、今年で50年

今年で、山科にある清水焼団地が東山の五条坂境界から移って来てちょうど50年になるそうです。私は、この清水焼団地50周年を迎えるにあたり、私の研究室で、50周年ロゴを制作したのがきっかけで、50周年記念展や、清水焼団地の運営面でのデザイン的なサポートをさせていただきます。

KIYOMIZUYAKI-DANCHI



— 京焼 未来へ —

清水焼団地創立50周年記念ロゴマーク

この9月に京都文化博物館で行われた清水焼団地創立50周年記念展「新天地を求めた京焼」では、清水焼団地の50周年を振り返るのはもとより、江戸時代の野々村仁清・尾形乾山・青木木米等からはじまり、原料の土の種類がの展示や、木箱、磁器の技術を発展させた碓子等のセラミック産業の紹介、そして、現代の作家たちによる、茶陶からオブジェ的な芸術作品まで、京都でのやきものの歴史を辿りながら、清水焼団地の今を紹介していて、その歴史と幅の広さは、日本を代表するやきものの産地ならではの、堂々たるすばらしい展覧会になりました。私は、この展覧会で、図録の装丁デザイン、ポスターデザイン等のグラフィックデザイン面でのサポートの他に、新しい製品開発(新規事業)を、1年以上前から清水焼団地の方々と一緒に考えてきました。



この9月に京都文化博物館で行われた清水焼団地創立50周年記念展「新天地を求めた京焼」では、清水焼団地の50周年を振り返るのはもとより、江戸時代の野々村仁清・尾形乾山・青木木米等からはじまり、原料の土の種類がの展示や、木箱、磁器の技術を発展させた碓子等のセラミック産業の紹介、そして、現代の作家たちによる、茶陶からオブジェ的な芸術作品まで、京都でのやきものの歴史を辿りながら、清水焼団地の今を紹介していて、その歴史と幅の広さは、日本を代表するやきものの産地ならではの、堂々たるすばらしい展覧会になりました。私は、この展覧会で、図録の装丁デザイン、ポスターデザイン等のグラフィックデザイン面でのサポートの他に、新しい製品開発(新規事業)を、1年以上前から清水焼団地の方々と一緒に考えてきました。

## 都文化で育まれた、京焼・清水焼

京都でやきものが作られるようになって、京焼と言われるようになったのは、17世紀初頭の頃からで、清水焼という名称も17世紀半ばには、既に呼ばれていたようです。それから、都文化の中で400年もの間育まれてきた清水焼は、日本の文化の中心であり続けた都文化の多彩な要求の中で、中国や日本各地の陶工たちや技術者が集まって、色絵付、磁器、染付、赤絵、白磁、青磁、金欄手きんらんてなど、あらゆる技法を駆使して多彩なやきものが創り出されるようになって、現在まで続いています。また、18世紀半ば頃から、問屋組織もつくられ、その他、木箱、原料の陶土や釉薬などいろんな関係する業種の人々が集まり、陶器の一大産地へと成長してきたのです。

明治大正期に入り、京都から東京への遷都等もあり一時は停滞しかけますが、江戸期に日本全国や中国からどん欲

に新しい技術を取り込んできた京都の人々は、明治維新後もその危機感から海外の新しい技術を取り込む等、どん欲に新しいことを切り開いてきました。販路も西洋等の海外へも拡げて行ったり、新しいデザインを創る試みや、高い製陶技術を生かして碓子等の工業用陶磁器も発達してきました。

そして、戦後昭和30年代に、これまで拡大してきた陶器産業に対して、手狭になった東山界隈の工房から、広い工房を模索し始めたことや、当時東山に点在していた登り窯からの煙害の問題、高度成長期における行政からの支援等、さまざまな要因から、東山の東側に清水焼団地が造成されたのでした。

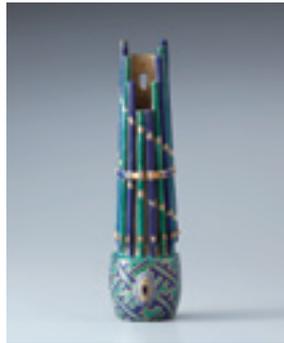
## 「清水焼」というブランド

さて、こういった、清水焼の伝統を強く受け継いでこられた清水焼団地の方々と一緒に新しい物を一緒に考えるにあたり、大切にしなければならないことは、「清水焼らしさ」または、「清水焼団地らしさ」で、それがブランド力を考える上では必ずしてはならない部分でした。「清水焼」と聞くと、私は、古くからなじみのある名前なので、日本のやきものを代表する銘柄の一つの名前と認識していましたが、「京焼」と言う呼称も古くから使われており、行政が指定している「経済産業大臣指定伝統的工芸品」や「京都府知事指定伝統的工芸品」などでは京都のやきものを「京焼・清水焼」と併記して呼ぶようになっていたりするのが現状で、「清水焼」とシンプルに呼ぶようになってきています。よく知らない人から、「京焼と清水焼の違いを教えてください」と聞かれることもあって、ちょっとわかりにくいようになってきている気もしています。

また、清水焼ってどんなやきものかを定義しようとしますと、伊万里焼や、備前のように、染め付け磁器ですとか、茶褐色の地肌ぢに窯変が特徴、というようなひとくくりでわかりやすく説明出来ないもどかしさが、清水焼にはありません。何百年も前から、どん欲に新しい技術を取り込んで、技術も種類もあらゆるものが創られているのが清水焼というところがありますから、なかなか、ひとくくり「これです。」とシンプルに表現出来ない。そういうところが、京都で育まれた清水焼の懐の広さであり、奥深さなのですが、現代の情報社会の中では、出来るだけシンプルな言葉で、簡単にわかりやすく一般に広めるのが良しとされていますので、なかなかそうはいかないところがありました。

この50周年を記念した展覧会を準備して行く中で、京都府総合資料館に納められている江戸時代の京都のやきものが、いくつか紹介されるということで、図録の撮影の為に、ある古清水のやきものを実際に見る機会がありまして、その時、私の中でしっくりきたことがありました。その作

品は、神社等で伝わる雅楽の笙という細い竹管を組んで出来た楽器の形を模した細かい繊細な細工が施されたきれいな花器「色絵笙形掛花生」(京都市立総合資料館蔵・京都文化博物館管理)で、やきものと言えば、ろくろで挽いた円形の皿や壺等に綺麗な上薬と絵付けを施してあるものですが、それだけにとどまらず、緻密な細かい造形とやきもので創られたとは思えないほどの精巧で独創的なフォルムは、当時の清水焼の作家たちの造形力や探究心の現れではないかと思いました。今回、50周年を期に行われた展覧会で清水焼団地の現在の作家さんたちの作品が数多く展示されておりましたが、日本芸術院会員でいらっしゃる今井政之先生、森野泰明先生をはじめ、作家それぞれが、清水焼の伝統のうえで、自らのスタイルをしっかりとって作陶されている方々ばかりで、どの作品にも同じような物がなく、その幅の広さや、フォルムの造形力は、技術の伝承だけではなく、その昔古清水で養われた、造形の精神までも、根強くこの清水焼団地の皆さんには受け継がれてきていることがわかりました。そしてこれが、清水焼らしさではないかと気がつきました。



色絵笙形掛花生

### 現在の陶工たちに混じって、新しい製品を考える

かつて明治期に清水焼のなかで「遊陶園」として、図案家や製陶家が集まり切磋琢磨を続けた集団があったのですが、その諸先輩を手本にして、今回は清水焼団地で作家、卸、原料、金工等の若手中に私も入って、「清水焼が何百年もの歴史の中で培ってきた成形技術、絵付けを、現代のライフスタイルに復活させる。」ことを共有のビジョンに設定し、勉強会を1年間進めてきました。はじめは、私の方から、現代のライフスタイルと消費マインド等の話や、ブランドデザインの勉強会等を数回させていただき、その後、具体的な制作物をメンバーの皆さんと検討してきました。メンバーから、「カトラリー」「遊具」「楽器」等いろいろな意見が出ましたが、最終的に、金属加工等も取り入れて清水焼団地の総合力を形に出来る「組み合わせを楽しむ: ワイングラス」の制作を進めることになりました。足となる台座は、金工で作成をお願いし、陶器製のうつつわ部分に金具を埋め込み、杯部分と台座を自在に組み合わせて楽しむというユニークなものです。杯部分のやきものは、成形、施釉、焼成、上絵付け、図案をそれぞれの専門の作家の分業で制作するという、かつて清水焼で行われた製造



工程をたどりながら、現代のライフスタイルの陶器制作を試みるということも行われ、伝統の手法で現代の生活文化にアプローチ出来る可能性を模索していきました。写真の「瑠璃釉銀彩蜻蛉蓮文杯」等がそれで、銀製の台座に銀彩の施された酒杯が、伝統を感じさせながら、モダンさも感じられます。その他にも、いろんな作家からさまざまなタイプのやきもののワイングラスが出来上がり、まさに造形力と幅の広さが清水焼という作品群になりました。

今回のことで、「造形力の技」「絵付けの美しさ」「製陶技術の幅の広さ」が、清水焼らしさの3要素となるのではないかと、私なりに分析をしています。原料、木箱、金属加工、碍子…等さまざまな業種のプロフェッショナルが隣同士で集まっているところが、清水焼団地のいいところで、その総合力を発揮する形で、まとまったのではないかと思います。出来上がってきた作品たちは、どれもそれぞれに個性豊かなものが並び、古清水の時代の造形の精神が、ここにも受け継がれた形で現れたのではないかと考えております。



瑠璃釉銀彩蜻蛉蓮文杯

### 最後に、

今回の事業に関わるなかで、清水焼のブランド力を高めるにはどうして行ったらいいか、ということをいつも議論してきましたが、このワイングラスのように、伝統ある造形の精神を形ある物にして、世の中に発信して行くことで、見せかけだけでなく、伝統に伴った中身のあるブランディングを進めて行くことができるのではないかと、考えています。これからも、そういう視点で、清水焼を見守って行きたいと思っております。

### ふなこし いちろう 舟越 一郎 氏 プロフィール



所属 京都市立芸術大学 ビジュアルデザイン研究室 講師  
略歴 1994年 京都市立芸術大学 ビジュアルデザイン専攻を卒業、(株)ATA入社 グラフィックデザイナー、アートディレクターを務める  
1995年 新宿タカシマヤタイムズスクエア ロゴデザイン  
2000年 JR名古屋タカシマヤ開業キャンペーン  
2003年 ソニークリエイティブワークス(株)入社 アートディレクター、プロデューサーを務める  
Japan Packaging Competition 特別賞「Flat Panel Television WEGA」  
2005年 日本パッケージデザイン大賞入賞「VAIO」  
Japan Packaging Competition 電気部門賞「VAIO」  
2008年より現職  
専門 グラフィックデザイン

【お問合せ先】

京都市中小企業技術センター  
企画連携課 情報・デザイン担当

TEL:075-315-9506 FAX:075-315-9497  
E-mail:design@mtc.pref.kyoto.lg.jp